

『世界の英語と社会言語学』 章末問題の考え方・解答例

序章 世界の英語と文化のコンテキスト

課題1. (p. 14—)

インターネットで容易に、動画も音源も入手できる。発音、表現、振る舞い方などに注目してみましょう。

課題2. (p. 14—)

Aについては、内円圏の英語と比較すると、特に冠詞や前置詞の選択に異なる特徴が観察できる。冒頭の Dear Sir を除き、I just want to-から始まる文章を本文第1文目としてカウントしている。そのほかは以下のような箇所が該当する。

○不可算名詞の事例

不可算名詞である treatment に冠詞(a)がつけられている。

p. 14 (3-4 行目) I got a bad treatment from a cable company

内円圏英語の標準的な言い方 1) I got bad treatment from ...

内円圏英語の標準的な言い方 2) I was treated badly by ...

○加算名詞・前置詞の事例

加算名詞である booster 及び roof が無冠詞である。roof につけるべき前置詞の使用に違いがみられる。

p. 14 (7-8 行目) Moreover after checking booster at the roof they used to enter the house to check the signal on TV.

内円圏英語の標準的な言い方) ... the booster on the roof ... the TV.

○文型に関する事例

p. 14 (13 行目) for which I had already paid to them

内円圏の英語では、pay to [人]は通常使用しない。

内円圏英語の標準的な言い方 1) for which I had already paid them

内円圏英語の標準的な言い方 2) which I had already paid them for

○状態動詞の進行形や語彙選択に関する事例

p. 15 (3-4 行目) they are having monopoly in this area and showing the monopolistic behavior

内円圏英語の標準的な言い方) they have a monopoly in this area and are displaying monopolistic behavior

Bについては、パラグラフや文の分け方には不自然さがあるものの、文法的・語彙の面では内円圏の英語であると言える。ほかに不自然さを感じる場合、それがどのようなことが原因となっているかを考えてみましょう。

第1部 ことばの相互行為と識別的理解

第1章 協調としての相互行為

課題1. (p. 39—)

目的は英語原稿の作成である（特に、問題の一文を英語でどう表現するかを決めることである）。会話の参加者が看護師であること、原稿に医療系の言葉が含まれているから、原稿は勤務上のものと推論する。英語原稿は国際学会発表用、海外クライアントへの営業用、病院の文書の英訳用など、さまざまに考えられる（看護師の仕事内容、日本の看護師が英語を使用する場面に関する知識があれば目的をより正確に推論できるはずだ）。

課題2. (p. 39—)

同じ目的（原稿作成）の達成に向かって、参加者全員が提案と問題意識を互いに共有しながらやりとりをしていると考えられ、参加者はお互いに協調的であると言える。「じゃない?」「かな?」など相手の意見を聞く表現、「そっか」「そうだな」など先行する相手の発話に応じる表現などから、参加者が同じ目的に向かってやりとりを進行していることがわかる。

課題3. (p. 39—)

提案するとき「○○でどうかな?」「○○でどうだろ」「○○かな?」などの言語形式を用い、一方的に自らの意見を押し付けず、相手に反論の機会を与えているというネガティブポライトネスの方略を使用している。

課題4. (p. 39—)

看護師たちが医療関係の原稿を作っている。内容からプライベートではなく勤務上の原稿作成と予想できることから、病院（職場）でやりとりが行われていると推論する。

課題5. (p. 39—)

スクリプト最終部分のjdの「わかった。ちょっと待って。“A procedure is… nurses.”は?」という提案に対して、参加者が全員納得し、目的の達成を示す発話をしている。

第2章 文化のコンテキスト

課題1. (p. 55—)

文化を定義する場合、その文化においてどのような要因が重要であるかを考えるだけでなく、それぞれの要因の優先順位についても注意深く観察する必要がある。そのような要因や優先順位は、文化ごとに相違点があると考えられる。定義しようとする文化については詳細な調査が必要であろう。本書が指摘しているように、表面的には同一文化に属していると考えられたとしても、年齢、性別、民族性、職業等のよりミクロの集団間で差異があることも意識しなくてはならない。「日本文化」や「アメリカ文化」のようなラベルを与えることで、表面的には特定の文化に属すると考えられるような人々や集団の存在が見えづらくなる場合があることに留意すべきであろう。文化の一般化と文化というラベルの中に存在する多様性について検討する必要がある。

課題2. (p. 55—)

「言語は文化である」と考えられる実例はどのようなものがあるだろうか。あなたの文化では、どのような事例が思い付くだろうか。いくつかの事例を取り上げ、なぜ言語は文化であると考えられるのか、またはそのように考えにくいのかについて論じてみましょう。

課題3. (p. 55—)

円滑なコミュニケーションをとるためには、言語コード以外にどのようなことが必要であるかを考えてみよう。例えば、言語コードが共通であるということのみでは、うまくコミュニケーションをとることは難しいでしょう。相手やその文化に対する知識などの背景知識やコンテキストに関する理解の有無は円滑なコミュニケーション上、非常に重要である。

課題4. (p. 56—)

日頃、あなたが(a)親、(b)友人、(c)仲間に対して使用していることば遣いについて振り返ってみましょう。具体的な場面を想定し、同じ場面において(a)～(c)のそれぞれの相手に対してどのようなことば遣いをしているかを書き出し、音、語、表現の観点から観察してみましょう。

第3章 丁寧さ（ポライトネス）の諸要因

課題1. (p. 78—)

- a. このやりとりの内容のみから推測することが困難である。puja はサンスクリット語の語彙で「祈り」「崇敬」を意味する。インターネット等で検索し、どのような文脈で使用されているのかを調べてみましょう。
- b. 日本における大安や友引のように縁起の良さを重要視する文化であることが推測できるでしょう。
- c. このやりとりの内容だけでは、暦を確認できなかった理由を特定することはできない。この抜粋の原著を探し、話の流れや文脈から推測することができるかどうかを試してみましょう。
- d. やりとりの参加者の文化的・宗教的背景に関する知識が必要でしょう。
- e. あなたの文化以外で、縁起の良し悪しを重視する文化が存在するかどうかを調べてみましょう。

課題2. (p. 79—)

- a. あいさつの後、天気に関する small talk (phatic communication) が行われている。「天気」が話題に選ばれているのは、関連性がある相手の領域に踏み入りすぎないためである。この small talk には「我々はビジネスの関係だけではない、私はあなた個人に関心がある」という positive politeness 的な意味合いもあるでしょう。このやりとりに後続する本題 (30 行目: you don' er: (.) accept our prices) が相手の面目を脅かすものであることを考えると、特にこの politeness の側面が重要でしょう。
- b. 相手が発話を終え、自分のターンが来た。相手の社交的な話 (天気の話) は特に具体的な返事が必要とするものでない (いい返事が思い浮かばない?)。そこで無難でフレンドリーな反応としてこの「笑い」が起きたと考えられる。「私はあなたのことをよく思っている」「私たちはフレンドリーな関係にある」という positive politeness 的な意味合いが込められているでしょう。
- c. 多くの文化において、本題に入る前に、small talk の時間があることは珍しくないだろう。small talk としてどのようなテーマで、どの程度の内容を扱うのかは文化差がある可能性がある。そのような文化差も含め、インターネットなどで調べてみましょう。

課題3. (p. 80—)

興味のあるインタビューやドラマを取り上げ、言語表現だけでなく、ジェスチャーや姿勢など非言語的要素も併せて、どのような動きがあるかを記述してみましょう。その記述に基づいて、ポライトネス要因について検討してみましょう。

課題4. (p. 81—)

p. 81 に示されている絵はあなたの文化でどのようなことを意味しているかについて考えてみましょう。また、同じ文化に属していると想定される人たちや異なる文化に属している人たちと意見交換を行い、相違点について検討しましょう。例えば、日本の文化について考えてみてください。

第4章 識別的理解と対話者

課題1. (p. 98—)

本章で取り上げている「ショーはいますか？」という電話での問い合わせに対する返答を振り返り、識別的理解、認識的理解、解釈的理解がどのようなものを指しているかを改めて考えてみましょう。これら3つの理解が相互に関係していることは明らかだが、どの要素がどのような効果を持つのか、また相互にどの程度関わり合っているかを確認する必要がある。どの理解が不足していたり、欠如すると、コミュニケーション上にいかなる影響を及ぼすのかを考察してみましょう。

課題2. (p. 98—)

まずは、標準英語の問題として具体的にはどのようなことが想定できるかを考えてみましょう。例えば、イデオロギーやWorld Englishesの観点から、標準英語をめぐる諸問題をリストアップしましょう。その上で、それらの問題と識別的理解の関係性について考察してみましょう。

課題3. (p. 98—)

Austin(1962)とSearle(1969)を参考にして、言語行為論について理解を深めましょう。その上で、Burkhardt(1990)を読み、どの研究者の説明が妥当であるかを考え、識別的理解、認識的理解、解釈的理解の概念との関連性について考察してみましょう。

課題4. (p. 98—)

ニュース番組の他にも、オンライン上で講演動画を視聴することができるTEDも参考になるでしょう。多様な文化圏出身の講演者が登場することから、彼らが話す英語も標準英語に限らない。いくつか動画を視聴したのちに、あなた自身がどのくらい理解できたのかを確かめてみましょう。また、誤解が生じた場合は、その箇所を書き出し、識別的理解、認識的理解、解釈的理解の度合いを考察してみましょう。

課題5. (p. 98—)

この手紙には、以下のような特徴がある。

○フォーマルとカジュアルの混在

- ・“the indices that have impacted on the polity”と非常に堅い言葉づかいがなされている文が But で始まっている(cf. However)。
- ・“The collective realization of these negative manifestations”と非常にフォーマルな言葉づかいで始まっている文が “comes in for a lot of flak”と話しことばのような表現を含んでいたり、その直後の文が話しことばのような修辭疑問文 (And so where can one start, is it not...) で始まっている。
- ・To add to this (cf. In addition / Moreover) と話しことばのような冒頭で開始するパラグラフには、poverty alleviation / nascent democracy などの堅い表現も含まれている。

○標準英語と比較した場合の不自然さ (太字は文法上の誤りとして認識される)

- ・And so **where can one start, is it not from Odi** [...].
- ・the government and indeed all Nigerians will stop **killing the joy** of democracy.

○英語（内円圏）として非常に不自然な表現

①非文法的表現の使用

原文) And so where can one start, is it not from Odi [...].

通常であれば、以下のような表現が望ましい。

- a. And so where can one start? Is it no from Odi [...]?
- b. To begin with, one must look at Odi [...].

②副詞の重複使用

原文) Interestingly, the human rights activists have surprisingly remained silent [...].

副詞の用法や意味を考慮すれば、以下のような表現が想定できる。

- a. Interestingly, the human rights activists have remained surprisingly silent [...].
- b. Interestingly, the human rights activists have remained silent [...].

③ 文構造上の不自然さ

原文) Again, uncertain attempts at poverty alleviation, curbing corruption, [...], the rising violent crimes, have all [...].

英語において列挙を行う場合、典型的には A, B, and C のように最終項目の直前に and を挿入する。

また、主語と動詞にあたる語の間にコンマを入れることは不自然に感じられる。以下のような表記が望ましい。

And, uncertain attempts at poverty alleviation, curbing corruption, [...] and the rise of violent crime have all [...].

⑤論理構造と接続詞の不一致

原文) Rather, what the press has done is to kill the joy of our democracy by continuing to indulge in Abacha saga [...]. One hopes this millennium, the press, the government and indeed all Nigerians will stop killing the joy of democracy.

上記の文と前文との論理関係は、Rather で接続する関係にはない。また、結論になって初めて kill the joy (of democracy) というカジュアルで、幼稚なことばが使われている。フォーマルさの観点から、undermine democracy / endanger our democracy などにすれば全体の統一感が増す。

これらの特徴を踏まえた上で、あなた自身は内容理解がどの程度可能だと感じられたらだろうか。そのように感じられた理由について、識別的、認識的、解釈的理解という観点で考察してみましょう。

第2部 音、文、語

第5章 音とリズム

課題1. (p. 118—)

それぞれのキャラクターの声優を調べ、その声優の出身地や使用言語（母語を含む）について調べてみましょう。声優の使用する言語とキャラクターの特徴づけを観察し、その関連性について論じてみましょう。

課題2. (p. 119—)

あなたがこれまで受けてきた教育の中で、教員から繰り返し教えられた事項を思い出してみましょう。また、英語を使用する場面で、相手に理解してもらえなかったという経験はあるだろうか。それはどのようなことが原因として考えられるだろうか。これらの事項と Jenkins (2000) との関連性があるかどうかについて検討してみましょう。

第6章 句と文

*The Story of English*のうち、以下に各問に応じていくつかの特徴を取り上げる。

課題1. (p. 150—)

スコットランド英語とイギリス/アメリカ英語を比較すると、以下のような特徴が観察できる。World Englishes の特徴を概説した文献を読み、イギリス/アメリカ英語と比較しながら、ほかにどのような特徴があるかを調べてみましょう。

○語彙

スコットランド英語の ken (know), loch (lake), wee (small), glen (valley), bonnie (pretty)などは、現在全国的に知られているものも多い。

○発音、アクセント

about, house (「アウ」ではなく「ウー」)、away (「ウェイ」ではなく「ワー」)

Scots のニュースの語りで、flight (「アイ」ではなく「イ」), manned (1音節ではなく2音節)などが目立つ。

課題2. (p. 150—)

アメリカ英語に対する黒人英語の影響には、以下のようなことが挙げられる。一般的に、黒人英語と呼ばれる英語の変種は、AAVE (African American Vernacular English) と呼ばれている。AAVE とアメリカ英語の特徴を調べ、それぞれの特徴を比較してみましょう。

○語彙

現在でも一般的に使用されているものもある。

nitty-gritty, banana, banjo

○文法

現代の African American Vernacular English (例 him be going) は元々話されていたものに近い ("minor syntactic changes")

○アクセント

アメリカ南部の白人のアクセントにも影響を与えている (黒人の住み込みのベビーシッターの女性 (nanny) の影響か)

課題3. (p. 150—)

オーストラリア英語には以下のような特徴がある。

○ルーツ

イギリスの流罪植民地の歴史: コックニー、犯罪者英語 (convict English; 'flash language')

○発音

コックニーと違い H を発音し、声門破裂音 (glottal stop) を用いない

○階層差が少ない

○メタファー

隠喩・直喩を多用するらしい（例 a kangaroo loose in the top paddock = crazy）

課題4. (p. 150—)

以下の2つの変種の特徴について調べてみましょう。

①BBC English

権力ある階層と結びついている Public school English がラジオの開発を通して BBC English として全国に知られるようになった。

②Indian English

インドではイギリスから独立した後も政治、訴訟などの公的な場面で英語が使用されてきた。

課題5. (p. 150—)

序章に登場した Kachru (1985a) の同心円モデルを参照しながら、任意の2カ国を選んでみましょう。例えば、日本で発行されている英字新聞を取り上げ、冠詞や前置詞などの観点から英文の特徴について観察してみてください。さらに外円圏や拡大円圏に分類される国々で発行されている英字新聞/雑誌を取り上げ、日本の場合と比較してみましょう。

課題6. (p. 151—)

現在取扱説明書は、オンライン上で公開されている場合が多い。内円圏、外円圏、拡大円圏それぞれに分類されている国の説明書を探してみましょう。それらの説明書の英語を比較し、どのような特徴があるのかを分析してみてください。また、各英語には相違点があるだろうか。

第7章 単語とコロケーション

課題1. (p. 164—)

以下のニュースサイトから、インド、ナイジェリア、シンガポールについての記事を取り上げ、標準英語に含まれないような言語的特徴を見つけてみましょう。

Hindustan Times (1924年に設立されたインド英語の日刊紙)

<https://www.hindustantimes.com>

THE TIMES OF INDIA (インドの日刊英字新聞)

<https://timesofindia.indiatimes.com>

The Straits Times (1845年に創刊された、シンガポール最大の新聞社)

<https://www.straitstimes.com/global>

The Guardian (Nigeria) (1983年に創刊されたナイジェリアの日刊紙)

<https://guardian.ng/category/news/nigeria/>

課題2. (p. 165—)

アンケートを実施する際には、以下のようなアンケート作成ツールが有用である。調査のニーズに応じたアンケートフォームを作成してみましょう。

Google Form https://www.google.com/intl/ja_jp/forms/about/

Questant <https://questant.jp>

ミルトーク (意見募集型アンケート) <https://milltalk.jp>

第3部 会話のスタイルと書きことばのスタイル

第8章 会話の相互行為

課題1. (p. 194—)

Brown and Levinson(1987)を参照し、ポジティブポライトネス及びネガティブポライトネスに関わるストラテジーを確認してみましょう。また、フェイスを脅かす行為 (FTA: Face Threatening Act) としてどのようなものが取り上げられているかを参考にしながら、本課題に取り組んでみましょう。

課題2. (p. 195—)

任意の会話を記録する際、ターンのやりとり、フロアの要求、あいづちなどの非言語要素に関する情報も併せて記録してみましょう。

第9章 書きことばの相互行為

課題1. (p. 244—)

今回の記事と CNN や BBC の記事を、話の進め方に着目しながら比較してみよう。また、記事中に、英語以外で、ナイロビで使用されている言語が使用されているかどうかを確認してみよう。なお、今回のニュース記事には、以下のような特徴が観察できる。

○語彙の感覚

- The drama: ここでは「事件」のような意味で使っていると思われる。現代の内円圏では drama はより軽い、ネットの「炎上」などのような対人関係に関するものを意図することが多く、今回取り上げられているような事件には使いづらい。
- the hostels: 学校の「寮」を指しているようだが、通常の場合は安い宿泊施設を指す。
- 動詞 admit の用法が内円圏英語と異なる。
and admitted in serious condition → and he was admitted in serious condition

○パラグラフの分け方

- ほぼ一文ごとに改行されていることが不自然である。

○全体のトーン、構造

- 一文一文が単純である (X のときに Y をしました。そのあと Z をしました)。構造、情報の出し方が「新聞記事」というより「物語」のように感じられ、新聞記事としては不要な情報が冗長に示されている。この記事はプロが執筆した新聞記事というものではないという印象を受ける。「新聞記事」ジャンルに期待されるスタイル、構造がケニアと内円圏英語とは異なるようである。

今回の記事と CNN や BNC の記事を、話の進め方に着目しながら比較してみよう。また、記事中に、英語以外で、ナイロビで使用されている言語が使用されているかどうかを確認してみよう。

課題2. (p. 245—)

アカデミック・ライティングを修得する目的について考えてみましょう。Kachru (1995b) を参照しながら、次の点について議論してみましょう。

- どのような目的でアカデミック・ライティングを学ぶのだろうか
- その目的は ESP で十分に達成することができるのだろうか

第10章 世界の英語文学をコンテキスト化する

課題1. (p. 265—)

任意の文学作品を取り上げ、Ashcroft *et al.* (1989)の主張がどの程度妥当であるのかについて検討してみましょう。

<参考>

Jhumpa Lahiri (1967年～)

ロンドン生まれのインド系アメリカ人小説家

課題2. (p. 266—)

マルチリンガルと呼ばれる人たちが感じている不快感とはどのような種類のものであるのかを考えてください。

終章 世界の英語：遺産と関連性

課題 1. (p. 276—)

英語帝国主義と世界の英語という観点を踏まえて、考えてみましょう。

課題 2. (p. 276—)

国際英語と言語権の関わりを考えてみましょう。

以上